

論文審査の結果の要旨

氏名： 清 水 享

博士の専攻分野の名称： 博士（文学）

論文題名： 近代から現代における彝族社会の変化と文化変容についての総合研究—凉山彝族を中心として—

審査委員：（主 査） 教授 松 重 充 浩 ㊞

（副 査） 教授 加 藤 直 人 ㊞ 教授 青 木 隆 ㊞

本請求論文は、四川、雲南、貴州の三省に分布する中国少数民族の一つである彝族のなかから、特に四川省凉山地方に住むノスと自称する彝族のサブエスニックグループに焦点を当てつつ、近代から現代にかけての同彝族の社会変化と文化変容の実態解明と分析考察をおこなった成果である。

これまでノスに関しては、歴史学や文化人類学の分野で若干の先行研究があるが、その多くは現在の中華人民共和国内における彝族の社会・文化的な地位獲得のための研究という側面が強い推論や希望的観測に基づく起源論や、彝族の「伝統性」や「前近代性」への関心を集中させた社会発展段階論分析に終始しており、近代から現代へかけてのノスの歴史実態を実証的に解明した研究はほとんどなかった。清水氏は彝語と彝文字に精通しており、その言語能力を活かして、フィールドワークと碑文、文献など歴史資料野読解を合わせて分析を進める手法でノスの歴史実態の再構築をおこなっており、各章（全5章）の内容要旨と主な画期的成果は、以下の通りである。

1. 内容の要旨

第1章では凉山地方の方言地域間の際と変容を漢文史料、フィールドワークデータ、考古学的資料などから分析した。火葬後の遺灰の扱い方に差異が見られ、それは一つにリネージ間の対立とそれによる呪詛が関わることを指摘した。また祖霊化の場と遺灰の山中へ散骨と関わりがあった可能性も改めて指摘した。凉山彝族の漢文墓碑の墳墓や「向天墳」についても分析し、それがすべて土司のものであることを指摘して、彝族の葬・墓制における漢文化の受容のプロセスを明らかにした。

第2章では凉山彝族土司の墓碑史料から19世紀の凉山彝族土司の状況を考察した。凉山地方で残された土司の墓碑の建てられた状況を整理し、阿都氏という土司の墓碑史料を中心にその内容を読み解き、19世紀半ば過ぎのこの土司の置かれていた状況や凉山彝族の地域で起きていた混乱について分析した。さらに19世紀以前で不明確になっていたこの阿都土司の系譜を整理検証し、その族源を漢民族とする特殊性について指摘した。

第3章では20世紀の凉山彝族土司「嶺光電」に注目して、その実態を解明した。嶺光電は土司であり、彝族知識人であり、彝族社会の地位向上を目指す運動をしたことを検証した。そして近代土司としての内政改革と、凉山地方の外での地位向上の対外的活動の動きを追った。そしてそれが一体の活動であったことを指摘した。内政改革は教育、衛生、アヘン禁止、産業振興など多方面で進められた。凉山地方以外での活動は西南夷族文化促進会などの団体結成し、『新夷族』を刊行し、各地の彝族や他の非漢民族の連携をしていたことを指摘した。

第4章では近代学問と彝文文献とどのように関わっていたのか、台湾中央研究院に収集された彝文文献の実態とその来歴から考察した。中央研究院の彝文文献はその内容さえ不明であったものを分析し、これらが彝語南部方言地域と彝語東部方言地域の文献と彝語北部方言地域の文献であることの知見を得た。南部方言地域の文献は紅河県楽育郷などのものであり、南開大学辺疆研究室の邢慶蘭が収集した可能性が高いことを指摘した。またこれら以外の文献は馬学良が武定県などで収集したのものであることも確認できた。そしてなかには弧本の木版本も発見することができた。

第5章では彝族のピモという宗教職能者の変容や変遷について検証を試みた。ピモは1950年代までは農村で主に活動していた。文化大革命中にピモは地下で活動をし、改革開放政策以降「町」に出てきたピモが出現した。特に街頭に露店を出して卜占、厄払い、病氣治療儀礼などをするピモなどの存在が社会

の変化のなかで現れてきたことを指摘した。こうしたピモは研究者から「真正」でなく「偽」であると認識され、研究の対象にさえなっていなかったが、彝族社会において一定の地位を占めていることを指摘した。

2. 主な画期的成果

本論文では、未だ空白の部分が多い近代から現代における凉山彝族歴史研究において、その空白部分について複眼的なアプローチをもって、総合的かつ実証的に分析を加えたのであるが、その主な画期的成果は以下の通りである。

(1) 実証的空白の克服を含めた歴史学研究領域における画期性について

(イ)人口規模約 550 万人のチベットの歴史研究は日本でも盛んだが、人口規模が約 800 万人の彝族の歴史研究は日本でその蓄積自体がとて薄く（彝族歴史研究者は 2 人のみ）、とりわけ近代から現代にかけての彝族歴史研究の蓄積は薄く、本論文はその学問的空白を埋める成果となっており、前述した起源論等に終始する従来の彝族研究に大きな一石を投じる成果となっている。

(ロ)特に、土司制度の歴史研究への貢献は大きいと評価できる。中国西南部では自己の政権を営む少数民族（非漢族）がおり、これらの政権は古くから中国歴代王朝の間接統治を受け、政権のリーダーは土司という官職に任命されていたが、土司として中国の行政システムに組み込まれた少数民族のリーダーは、間接統治を受けながらも、自己領土内における行政権を有していた。第三章において、清水氏が取り上げる事例研究では、嶺光電が土司として 1920～1940 代において自己領土内の改革を試み、なおその活動が貴州省の苗族など西南中国に居住する他の少数民族にも、自己の生活を改善する機運をもたらしたことを実証している。これまでの研究では、20 世紀になって土司の失政が強調されてきたが、彝族土司の中から自己領民の生活を改善して自己の文化と社会を変更させる土司がいたという清水氏の論点は、これまでの土司史像を一変させて、今後の土司研究に新しい視点を提示する画期的なものとなっている。

(ハ)現代史のなかでの宗教職能者「ピモ」の文化変容について、彼らが町に出ることを指摘する研究はほぼなく、そのはじめの論考である。

(2) 史料環境における画期性について

(イ)従来の彝族の歴史と文化に関する研究は漢族という部外者の史料に依拠してきたが、清水氏が収集・分析した中央研究院所蔵の彝文文書の研究は、新たな史料の利用を提唱すると同時に、彝族の価値観を明確にして、彝族の立場からの分析視点を可能にするので、極めて重要な成果である。

(ロ)特に、本論文において清水氏が、台湾の中央研究院で従来埋もれていた彝文文献の発掘にとどまらず、彝文文献の孤本(他にはまったく見ることのできない文献)の解明をはじめとした同史料群の来歴解明などの史料解題作業も並行して行ったことは、歴史研究において前提となる同研究領域における新たな史料環境の構築という極めて大きな貢献と位置付けられる成果となっている。

(ハ)また、漢文史料に関しては主に台湾の国史館(公文書館)や中央研究院の档案史料を用いられているが、これらは中国少数民族歴史研究において用いられることは極めて稀であり、同史料群内における中国少数民族関連史料の発掘を大きく進める契機の提供ともなっている。

(3) 方法論的な画期性について

本論文の手法は文献史学に基づいた実証的な方法を中心としつつも、他の学問分野の手法や知見を援用した総合的な研究となっており、考古学的分析の手法、民俗学的視点の援用、言語学分野まで広がる視点、文化人類学的フィールドワークの方法など多角的な方法論を駆使して論を展開した。こうした多角的視点からの総合的な手法を用いた歴史研究は、中国の少数民族歴史研究でも極めて少なく、同研究領域における最初の学際的な研究成果とも言えるもので、新たな方法論的画期性を提供するものとなっている。

よって本論文は、博士（文学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成 年 月 日